

## ブルジョア啓蒙思想家の評価

以上に述べたことを要約しよう。スカールゼンはその見解の性格からすれば、ブルジョア啓蒙思想家と呼んでもいい。彼の見解は、十八世紀の経済学者の見解と非常によく似ている（もちろん、ロシアの条件というプリズムをとおした相応の屈折をもって）。そして、六〇年代の「遺産」の一般的な「啓蒙主義的」性格は、彼によってじゅうぶんはっきりと表現されている。西ヨーロッパの啓蒙思想家たちのように、また六〇年代の文学の代表者たちの大部分のように、スカールゼンは、農奴制度と、経済的、社会的、法律的分野におけるこの制度の所産のすべてにたいする熱烈な敵意によって鼓舞された。これは、「啓蒙思想家」としての第一の特徴である。第二の特徴は、ロシアの啓蒙学者の全体に共通するものであるが、——啓蒙、自治、自由、ヨーロッパ的生活形態と、一般にロシアの全面的ヨーロッパ化との熱烈な擁護である。最後に、「啓蒙思想家」としての第三の特徴は、人民大衆、主として農民（まだ完全には解放されていなかったか、あるいはやっと啓蒙思想家たちの時代に解放されつつあった）の利益の主張と、農奴制度とその残存物とを廃止すればおのずから全般的福祉がもたらされるということにたいする衷心からの信念と、それに助力しようとする心からの願望とが、これである。これらの三つの特徴こそが、わが国で「六〇年代の遺産」と名づけられているものの核心をなしている。……………

われわれはまえに言った。スカールゼンはブルジョアである、と。どうしてこういうふうに特徴づけるかについての論証は、すでに十分にあげておいた。しかし、つぎのような但し書をつけることが必要である。すなわち、われわれのあいだでは、この言葉に（歴史的時代の差別なしに）少数者の利益の利己的な擁護ということをもすびつけて、きわめてまちがって、せまく、反歴史的にこの言葉を理解していることが、しばしばあることである。十八世紀の啓蒙思想家たち（一般に承認されている意見は、彼らをブルジョアジーの指導者のなかに入れて考えている）が言っていた時代、また四〇年代から六〇年代までの、わが国の啓蒙思想家たちが言っていた時代には、すべての社会問題は、農奴制度とその残存物とにたいする闘争に帰着していたのだということを、わすれてはならない。新しい社会＝経済関係とその諸矛盾とは、当時はまだ萌芽的な状態にあった。したがって、その当時には、ブルジョアジーの思想的代表者のあいだには、どんな利己心も現れていなかったのである。反対に、西欧でもまたロシアでも、彼らは、まったく心から全般的幸福を信じ、心からそれをねがっており、農奴制のうちから成長してきた体制のなかに、真実、矛盾を見なかった（一部分は、まだ見ることができなかった）のである。スカールゼンが、自分の著書の一カ所にアダム・スミスを引用しているのは、ゆえないことではない。われわれが見てきたように、スカールゼンの見解も、その論証の性格も、多くの点で先進的ブルジョアジーのこの偉大な思想的代表者の諸命題の繰返しである。

そこで、もし、スカールゼンの実際的な願望を、一方では現代のナロードニキの見解に、他方ではこのナロードニキにたいする「ロシアの教え子たち」の態度に比較するなら、つぎのことに気がつくだろう。すなわち、「教え子たち」は、つねにスカールゼンの願望を支持する立場に立つだろう。なぜなら、これらの願望は、進歩的な社会諸階級の利害を、現在の道、すなわち資本主義的な道にそっての社会発展全体の緊切な利害を表現している

からである。

第二卷 どういう遺産をわれわれは拒否するか P501~504

1897 年末に流刑地で執筆

**コメント**

新しい社会＝経済関係とその諸矛盾とが、まだ萌芽的な状態にあった時代の啓蒙思想家たちはブルジョアジーの思想的代表者であったが、彼らは、どんな利己心もなく、まったく心から全般的幸福を信じ、心からそれをねがっていた。私たちがこれらのブルジョア啓蒙思想家を評価するのは、彼らが「進歩的な社会諸階級の利害を、現在の道、すなわち資本主義的な道にそっての社会発展全体の緊切な利害を表現してい」たからである。

私たちの政策は、資本主義を後ろへ引き戻すのではなく、おしすすめて社会主義を準備することである。そして、その過程で労働者階級の隊列を整えることである。